動物行動と人間社会
―オトシブミの文化誌／言語・文化表象―

An Animal Behavior and Human Society
-Culture of A Leaf-Rolling Weevil/Language • Culture Symbol-

成城大学名誉教授
山田直巳 YAMADA Naomi

はじめに

動物行動のアクションを人間社会が或る比喩・暗示として受け取る場面が少なからずある。例えば「烏鳴きが悪い」（烏の鳴き声），「虫の知らせ」（夜の蜘蛛の行動）等といい，あるいは猫の顔洗い行為を見て，どの位置まで前足をあげるかで天候占いをする。それらは，動物行動には，人間社会に対する深い暗示（メッセージ）と意味が込められていると解釈するもので，時に人間はそれを自らの行動指針とすることがある。もともと動物のアクションと人間社会とはそれぞれ独立した別の系で，関係性はないはずであるが，難問に出くわし容易に解決できない場合，非合理ではあっても「藁をもすがる思いで」何らかの指針を得たくなる。これこそが人間の社会文化の持つ特徴といえようが，不安がもたらす「他文化の引用」行為ということになるのではないか。

オトシブミという一センチ足らずの小さな虫が知られている。この虫は，クヌギ・ナラ等の葉を丸めて「ゆりかご」と呼ばれる巣をつくり，そこに産卵し，葉を切り落とす。木の下に落ちた夥しいそれを「落とし文」と呼ぶ。落ちた葉の形状があたかも巻物のように見えるので，日本古来の巻子本を踏まえ，このように呼称するようになった，という。つまり落ちている葉（「ゆりかご」）の形状と巻子本の類似をもって，我々はそれをオトシブミと呼ぶようになった，という呼称由来。

ことはこれにとどまらない。日本には，古来「落書（らくしょ）」という社会行動が知られている。『精選版 日本国語大辞典』によると，

> 時の権力者に対する批判，社会の風潮に対する風刺やあざけりの意を含んだ，匿名の文書。人目に触れやすい場所に落として人に拾わせたり，相手の家の門壁などにはりつけたりしたもの。平安初期から見られる。（下略）。

とあり，また「語誌」には，

> 「おとしぶみ」の漢字表記「落書」を音読したものであり，元来は匿名の投書により犯人を告発する文書をいった。平安時代には，政争に伴う便宜的手段としても行われ，次第に権力者に対する批判の意図をもって用いられるようになった。著名な例として，南北朝時代の「建武年間記」に見える「二条川原落書」がある。

と詳細が記され，つまり「落書」は社会コミニュケーション手段として，まさにマスコミそのものであった。

オトシブミという昆虫の繁殖行動を踏まえた「落書」＝落とし文は，日本人の社会行動の在り様を捉えた一つの言葉としてなかなか含蓄が深い。かつての若者の恋愛行動の一つ「ハンカチ落

とし」もこれを踏まえたものであろう。『青い山脈』（石坂洋次郎）では，好意を寄せる女子生徒の前を通過するとき，男子生徒が意図的にハンカチを落とす。それを拾ってもらうことを契機として関係性を起こそうとの狙いであった。このエピソードは，「落書」の伝統を応用したものであったが，SNS 時代の若者には説明が必要であるだろう。

さて次に『ブリタニカ国際大百科事典』でオトシブミを確認してみよう。

> オトシブミ（Apoderus jekeli）。鞘翅目オトシブミ科。体長 7 ～ 10mm。体は黒色で上翅と前胸後縁は赤色であるが，変異があり，全体黒一色の個体もある。頭部は三角形で後方へせばまるが，雄のほうが長く，雌では短く丸みが強い。前胸は前方へ三角形にせばまる。雌はクヌギ，ナラ，ハンノキなどの葉を切り，その中に卵を包み込んで落とす。幼虫はその葉を食べて育つ。北海道，本州，四国，九州，朝鮮，シベリアに分布する。本種の属するオトシブミ科 Attelabidae はゾウムシに近縁で，オトシブミ亜科とチョッキリゾウムシ亜科に分けられる。前者は産卵するとき葉を切り，中に卵を包み，主脈に直角の軸で葉を巻き上げて地上に落とすので，その形から「落し文」の名が付けられた。後者は吻で若枝や果実の柄を切り，先の部分に穴をあけて産卵するが，葉柄や葉を切る種もあり，葉を主脈に平衡の軸で巻く。日本に 85 種を産する。

櫻井一彦博士は，日本は申すまでもなく中米コスタリカ調査なども含め，フィールド広くオトシブミ研究に従事して来られたプロフェッショナルである。しかるにこれにかかって，日本における言語文化・社会表象としても極めて興味深いものがあり，動物行動学からは離れるが，社会文化論の立場から日本史を紐解く形で，聊か論じてみたい。

一，「落書」

「落書」表記の最も古い用例は，菅原道真が平安前期（九 00 年）に自ら編集し醍醐天皇に献上した『菅家文草』中の「詩情怨古調十韻呈菅著作」にあるとされる。道真の詩の巧拙を自らの「落書」によって左右したと疑われたと歌うものである。その末尾に登場する。

> 去（い）んじ歳　世は驚く　詩を作ることの巧（たくみ）なること
> 今年　人は謗る　詩を作ることの拙（つたな）きことを
> 鴻臚館裏　驪珠（りしゅ）を失ふ
> 卿相門前（けいしやうもんぜん）白雪を歌ふ
> 名を顕（あらわ）したるは賤しきにも　名を匿（かく）したるは貴きにも非ず
> 先なる作は優れたるにも　後なる作は劣れるにも非ず
> 一人口を開きて　万人喧（かまびす）し
> 賢者言を出して　愚者悦ぶ
> 十里　百里　また千里
> 駟馬（しば）は龍の如くなれども　舌に及ばず
> 六年　七年　若（も）しは八年
> 一生は水の如く　決（やぶ）るべからず
> 一生は水の如く　穢（けがらは）しき名し満てり
> 此の名は何（いか）なる水をもちてか　清潔なることを得む
> 天鑑（てんかん）従来孔（はなは）だ明らかなることあり
> 人間　哲（あきらか）なることなかるべからず
> 我を悪（にく）むに偏（ひとへ）に儒翰（じゅかん）なりと謂ふ
> 去んじ歳　世の驚きしこと　自然に絶ゆ
> 我を呵（か）して終に實（まこと）の落書となす
> 今年　人の謗（そし）るは眞説（しんせち）ならじ

内容を整理すると，次の如し。去年匿名の詩が

あらわれた時には，世間はその作の巧いのに感心して道真が作ったのだろうと疑いをかけた。ところが今年, 明らかに私が作った詩に対しては, 人々はまずい作だとけなすのである。作は駟龍の珠をもかちうるくらいに詩の名声を博する機会であったのに，まずい詩だというのですっかり名声を落としてしまった。卿相（大納言藤原冬緒）を謗る匿詩が伝えられて，それが道真の作ではないかと疑いがかけられた。道真が落書をしたのだということを一人が言い出すと，それが次から次へと伝わって，万人の口から喧しくうわされることになる。地位の高い人が流言をしだすと，下々のものは喜んでそれに雷同する。噂の飛ぶことは早く，見る見るうちに遠方まで広がってしまう。（中略）一生は水をたたえたようなもの，匿名の詩で大納言を誹謗したという汚らわしい汚名がその水にしみ広がって，その汚名はどのような水で清めすすごうとしても，潔白にすることはできないであろう。昔から天道は見通しで，真偽黒白は，たいへんはっきりつくものである。世間の，私を憎む人は, もっぱら学者で詩人であると言ってそしる（儒翰は，儒学者であって詩人を言う）。去年世間を驚かした匿詩事件も，どうやら自然に収まった。我をなじって，とうとう落書の真犯人だとしてしまった。もしそれが本当なら，今年道真の詩がまずいという誹りは，真実の批評ではなくなる道理ではないか。

いわば道真の憤懣やるかたない抗弁の詩であった。高級官僚の間では様々な軋轢があり，それが噂の流し合いという形で，―詩作が政治そのものになるという社会・時代状況の中で生き残っていくにはどう行動すればよいのか。匿名の投書＝落書は，その社会の武器であり，その使い方ひとつで，様々な結果を生むということであった。

次に『本朝文粋』の用例を見よう。これは一〇六〇年ごろの成立で，嵯峨天皇から後一条天皇時代までの詩文四〇〇編余りを収めたもので，詩は少なく奏状・表・序などを多く含む。平安時代の文藻の粋を集め，後世の文章家の模範となったと言われる。そこに「櫻嶋忠信落書（さくらしまのただのぶがらくしょ）」（「巻第十二，落書」）と題された文章がある。自分が人事で枠外であるとされたことを嘆いて「落書」を作ると，それによって, 大隅守（おおすみのかみ）に任じられた，ことを記す。

> 今春（こんしゅん）の詔勅哀楽（あいらく）多く，半ばは盡（ことごと）くに眉を開き半ばは頭（かうべ）を叩（たた）く。官爵專（もは）らに功課（こうくわ）の賞（はやし）に非ず，公私寄せて贖勞（しょくらう）の求めを致せばなり。除書（じよしよ）の久しきことは貢書（こうしよ）の致るを待ち, 直物（なほしもの）の遅きことは獻物（けんもつ）の収（おさ）まるを期（ま）てばなり。右太閤（うたいかふ）は賢にして衆望歸（しゆうばうおもぶ）き，左丞相（さしようじやう）は佞（ねい）にして皇猷（くわういう）を損へり。初め魚の水に逢ひて恩波濁（にご）り，共に駿河を見て感涙流る。和風に動かずして櫻獨り冷え，暖露にぬらされて橘先ず抽（ぬきい）づ。内臣（ないしん）貪欲にして世間嘆き，外吏沈淪（ぐぁいりちんりん）して天下を愁ふ。金銀千萬两を招（よ）び集へ，山海十二州を沽（う）り亡（うしな）ひぬ。

内容を整理すると次の通り。今春の補任（任官）の詔勅には，悲しむものもあり喜ぶものもある。眉をひらいて喜ぶものや頭を叩いて嘆くものもある。哀楽するものは半々である。官職爵位の昇ることは主として仕事の成績（功労）のあることを誉められたわけではない。公私ともに金を納めて官職を求めるようなやり方をよりかかってするからだ。新たに官職に任命される書（辞令）の久しく来ないのは，調貢（みつぎもの）の目録が届くのを期待して待っているからである。なおし物（除目の後で，召し名に誤って洩れたものを直し改める事）の遅いのは，献上物（賄賂）が収められるのを期待して待っているからである。右大臣（菅原道真）は賢くて大衆の人望がその方に向く。左大臣（藤原時平）は心のねじけた人（口先のうまい）であって，天子のはかりごと（大政）を損じた。魚と水との交わりのように君臣の契りの深い

ことを喜んだばかりだが，皇恩の波は澄まない。自分と橘某とは東国の駿河の方へ，官吏として下向することになって，共に感涙にむせんだ。春ののどかな柔らかい風にも影響を受けないで，櫻（櫻嶋忠信）はひとり冷え切っている。君恩を受けないで，櫻はひとり冷遇を受けている。しかし暖かい露に濡らされて橘は先ず芽を出す。橘（橘氏の某）は暖かい君恩を受けて昇進する。宮中の大臣たちは欲が深く，…と世間は嘆く。地方の官吏の落ちぶれることを愁う。諸国の官を売り払って（売官によって），代わりに多額の金銀を着服した。

つまり腐敗した官吏の売官の問題を落書の中で風刺したので，やがて櫻は大隅の国守に任命された，という。つまり売官問題を風刺し暴露批判することで，累の及ぶのを恐れた上司たちから，そこそこの地方官の位を奪い取ったといえよう。上司から見れば，位を与えて，懐柔したということになろう。

落書の，いわば社会的機能を語った文章で，このような腐敗の実態があると批判することで，―そしてそれを広く世間に広報することで，社会の在り様を正そうとするものと受け取ることもできる。しかしことはそれにとどまらず，むしろ自己を売り出す効果もあった。現に結果として，忠信は「大隅守」を拝命していた。

次に鎌倉時代前期の軍記物語に用いられた例を見たい。『平家物語』である。その巻八の冒頭，「山門御幸の事」の条に次のような「落書」の記述がみられる。内容は，落書によって，自己を思い出してもらい，結果として正三位を受けることが出来た，というもの。そこに関るのが落書であった。

> されども四の宮位につかせ給ひて後，そのなさけをもおぼしめしいでさせ給はず，朝恩もなくして歳月をおくりけるが，せめての思のあまりにや，二首の歌をようで，禁中に落書をぞしたりける。
>
> 一声（ひとこえ）は思ひ出てなけほととぎすおいその森の夜半（よは）のむかしを
>
> 籠（こ）のうちもなほうらやまし山がらの身のほどかくすゆふがほのやど
>
> 主上是を叡覧あッて，「あなむざんや，されば いまだ世にながらへてありけるな。今日までこれをおぼしめしよらざりけるこそおろかなれ」とて，朝恩かうぶり，正三位に叙せられけるとぞきこえし。

紀伊守範光という人物が四の宮に様々に知恵を尽くし，後の帝位につく契機を作った，と陳べるくだり。四の宮は平家滅亡に伴い西国に落ち行くはずであったが，範光が将来あるを思って止めた。すると案の定，四の宮は翌日に法皇の迎えを受け，結果として帝位につくことが出来た，という劇的展開。それをを引き出すきっかけを作ったのが範光であった，と述べる。いわば範光は，四の宮の大恩人であったが，「されども四の宮位につかせ給ひて後，そのなさけをもおぼしめしいでさせ給はず」，と範光の功績を忘れてしまったかのようだという。これでは恩知らずの謗りを免れまい。その間「朝恩もなくして歳月をおくりけるが，」とあり，何の音沙汰もなかったという。

そこで「せめての思のあまりにや」と思い余って行動を起こす。「二首の歌をようで，禁中に落書をぞしたりける」と。短兵急に事を起こし（進言）たのではない。じっと待ったのだがと心の内を述べ，思い余っての行動と補足する。しかも二首の和歌をもって「落書」をしたのである。風刺・嘲弄・批判の意を込めた和歌を，宮中の人目に触れやすいところに張り付け，あるいは落としておいた。

「二首の歌をよう（詠む）で」とあるが，「一声は思い出て―」は新たに作った歌ではなく，『新古今和歌集』に載る範光の歌を引用した。二首で過去の自分の功績を暗示しつつ，自分自身の出世の希望を述べたものである。思い出して啼いてほしい霍公鳥よ，その昔のできごとを思い起こしつつ。もう一首「籠のうちも―」は，『玉葉集』に載る寂蓮法師の歌で，宮仕えの希望をのべたものである。

落書をする場合，例えば歌で意思を表現するならば，新たに作ったものでなく，評価の定まった歌を用いる。しかし心は自分の新たな望みということで，そこに重ね，あたかも新作したように装

うのである。伝統を踏まえ，時に知られた中国の詩句を引き，あるいは日本の名のある歌を引く。引用は，いわば「本歌取」の手法を用いるもので，いわば文化の引用なのであった。しかればこそ，落書の重みはさらに増すのである。

はたして「主上是を叡覧あッて，「あなむざんや，さればいまだ世にながらへてありけるな。今日までこれをおぼしめしよらざりけるこそおろかなれ」」と天皇は大いに反省する。「こそ」と強調していることに注意。そして，範光は正三位という高い位を得たというのである。来歴譚としては，様々な解釈が可能なのであるが，歴史事実としても範光は正三位に就いている。

政治の構造を見るに，直接に帝に意見するということは許されない。そのような社会にあって，気付いてもらうにはどうしたらよいか。「叡覧」とあり「天皇が歌をご覧になる」仕掛けが必要である。その社会的仕掛けが落書であった。誰の意図であるか不明を装って，天皇自らが自身の立場において，誤りに気付き処置するという装置が必要なのである。王権という権力構造がそのような仕掛け・装置を必要とする。あたかも神であるとする王に意見する等ありえないからである。

次に『太平記』をみてみよう。『太平記』は十四世紀中葉の成立とみられ，軍記物のジャンルに入るが，まさに動乱の時代社会を映して興味深い。また動乱の詳細を観察するもの，批評する者の階層，そしてそれを享受する者の存在が明確に記されるのである。

巻第六の隅田・高橋軍の敗走ぶりを描いた部分。

> 只我先ニト橋ノ危ヲモイハズ，馳セ集リケル間，人馬トモニオシ落サレテ，水ニ溺ルル者数ヲシラズ，或ハ淵瀬ヲモ知ラズ渡シカカツテ死ヌル者モ有リ，或ハ岸ヨリ馬ヲ馳セ倒テ其儘討タルル者モ有。只馬・物具ヲ脱捨テテ，逃延ントスル者ハ有レドモ，返シ合セテ戦ハントスル者ハ無リケリ。而レバ五千騎ノ兵ドモ，残少ナニ打チナサレテ這々京ヘゾ上リケル。其ノ翌日ニ何者カ仕タリケン，六条河原ニ高札ヲ立テ一首ノ歌ヲゾ書タリケル。
>
> 渡部ノ水イカ許早ケレバ高橋落テ隅田流ルラン
>
> 京童（キャウワランベ）ノ癖ナレバ，此落書ヲ歌ニ作テ歌ヒ，或ハ語伝テ笑ヒケル間，隅田・高橋面目ヲ失ヒ，且（シバラク）ハ出仕ヲ逗メ，虚病シテゾ居タリケル。

敗走する兵（つわもの）達は，第三者が高所からみれば，甚だ無様でただ逃げる事ばかりに懸命で，それでは逆効果ではないかと思われることも平気で，というか夢中で「ただ死にたくない」とやってしまう。その整わない，無秩序，不統一な様が混乱の混乱たる所以である。隅田・高橋の兵達もまさにそれを演じている。その様を詳しく丁寧に描写する。そのトリビアルな事実描写への拘りがこの作品を一層際立たせる。

その状況全体を批評する者がいる。「高札ヲ立テ一首ノ歌ヲゾ書タリケル。」とある。兵（つわもの）たちは，ただ戦にのみ邁進するが，それは全体状況の中での一部に過ぎない。冷静客観に観察すれば，嗤うべきあるいは滑稽な行為・事象はいくらでもあるであろう。その批評精神の発露が「高札」である。

水の流れがどれほど早いからだろうか，高橋は落ち，隅田は流されていく，と歌に作る。敗走する兵は，我先に逃げようとするが，―その混乱ぶりがさらに死を招く結果になるのであるが，それが逃げる当人には理解できない。ここには，戦をする兵たちとそれを傍観する，いわば観客としての庶民がいる。その対応がここにある。その批評家，庶民を「京童」といい，冷静に批評し或いは，「此落書ヲ歌ニ作テ歌ヒ，或ハ語伝テ笑ヒケル」という行為に及ぶ者であった。彼らは戦を「歌ったり」「語伝へたり」「笑いの対象とする」者たちであり，それを形にするのが，「落書」という軸であった。その総体は，「落書文化」とも言いうるもので，その時代・社会に受け入れられ，「作りこれを享受する」階層のあることを示していた。「事件」とそれを「観察する者」，そしてそれを「語る者」，という三者が，語る者の批評精神で構造化される。落書はここでもメディアとしての機能を果たしていた。

『太平記』巻第十四，「将軍御進発大渡・山崎等

合戦の事」の条にも「落書」は登場する。

去ル程ニ改（アラタマノ）年立歸レドモ，内裏ニハ朝拝モナシ。節会モ行レズ。京白川ニハ，家ヲコボチテ堀ニ入れ，財宝ヲ積で持運ブ。只何ニカ云フ沙汰モナク，物騒ク見ヘタリケル。懸ル程ニ，将軍已ニ八十万騎ニテ，美濃・尾張へ著給ヌト云程コソアレ，四国ノ御敵モ近付ヌ，山陰道ノ朝敵モ，只今大江山へ取リアガルナンド聞ヘシカバ，此間召ニ応ジテ上リ集タル国々の軍勢ドモ十方へ落行ケル程ニ，洛中ニハ残リ止ル勢一万騎マデモアラジト見ヘタリケル。其モ皆勇ル気色モナクテ，何方へ向ヘト下知セラレケレドモ，耳ニモ聞入ザリケレバ，軍勢ノ心ヲ勇マセン為ニ，「今度ノ合戦ニ於テ忠アラン者ニハ，不日ニ恩賞行ハルベシ。」トシ壁書ヲ，決断所ニ押サレタリ。是ヲ見テ，其事書ノ奥ニ例ノ落書ヲゾシタリケル。

カク計（バカリ）タラサセ給フ綸言ノ汗ノ如クニナドナカルラン

内容は次の如し。年あらたまって，建武三年の新年になったが，内裏では朝拝・節会も実施されない（これは少し言い過ぎで，史実＜「行類抄」「師守記」「園大暦」＞では小朝拝と節会は実施した）。ただし，兵乱により国栖奏の笛，および立楽は省かれた。京都の北部，賀茂川以東，東山との間の地域では，家を壊して堀に入れ，財産を持ち運ぶ者がある。これといった具体的な沙汰はないが，慌しく動く様が見られる。戦乱に基づく社会の動揺があちこちに見られる。八十万騎の兵たちが美濃・尾張に着いたという報知があり，四国の敵，山陰道の朝敵も大江山に差し掛かっている等の朝廷への報告があるので，召しによって上京していた軍勢は様々な方向へと落ちていく。だから，京にいる軍勢は一万騎にも満たないと思われる。その軍勢も元気がなく，どちら方面を守れと命令されてもそれをまともに聞く様子でもない。そこで，軍勢に勢いをつけさせようと掲示をする。「今度の合戦で忠義の働きをした者には，早速恩賞が行われるぞ」と紙に書いて（箇条書），壁に張りだした。

すると，その箇条書きの少し離れた場所に早速「例ノ落書」がなされた。「例ノ」とあるので，「落書」行為が多くの人々にとって周知で，頻繁に行われたことを示している。その内容は，箇条書（触書）きに対する批判である。朝廷は恩賞を実施するだけの経済力がすでになくなっているのに，できるなどと空手形を切っていると指摘。人々は朝廷の狼狽ぶり，裏付けのない言葉限りの箇条書きを批判しているのである。「綸言ノ汗ノ如」，すなわち「天皇の言は汗が出れば，再び体内に戻り得ないように，口から出たら取り消せない」のに空手形を切ると批判されたわけだ。現代であれば，大デモ行進であり，プラカードの林立，といった体である。

次に江戸時代初期の『きのふはけふの物語』を見てみたい。作者未詳で，一六一五年頃の成立かといわれる。軽妙な笑話や狂歌，武将の逸話などを収め，時世を反映した破戒僧や男色の話が多くみられる

その 13 に，次の話が載る。

むかし，嵯峨の天皇の時，「無悪善（むあくぜん）」といふ落書をたてた。御不審なされ，あるほどの物識（ものしり）をよせて，御読ませ候へども，さらにこれをあかすものなし。爰に小野篁と申者まかり出て，「無悪善，悪サガ，無ナクハ，善ョカラン」とよみた。其時，御門，逆鱗なさるゝは，「篁よりはるか物識さへ，え読まぬ物を，此者読み申たるは，さだめて，其篁がたてつらん」と，すでに流罪におよびける時，篁申しけるは，「物を識り候へば，結句，罪科に行はるゝこと，迷惑」のよし申上ければ，「物を識りたらば，さらば何にても，むつかしく，読まれぬ事をたくみて，読ませ候へ」と，物識どもに，仰付られければ，子の字を六つ書きて，御読ませ候へば，篁，難なく読みけるほどに，「さては物識」と仰せられて，流罪を，御赦しなされた。

ね　この　この　こ　ね　こ
子　子　子　子　子　子
し　しの　この　こ　じ　し
子　子　子　子　子　子

頓智，機知のようなもので，気転がきけば六字を二回読めばよいわけである。この話は，『宇治拾遺物語』に類話があり，近松門左衛門の浄瑠璃に用いられた後，しばしば近世文学の題材になっている。「落書を立てた」とあり，政治社会の事件や個人の言行に対する風刺または嘲弄の意をこめた匿名の文としてはやった。狂歌の形で行われたものが多い。「落書」は重箱読みをすれば，「らくがき」で，知的遊戯としても面白い。小野篁は平安前期の文官で優れた歌人であったが，博学の漢学者としても著名。遣唐副使の勅命に背き隠岐に流されたが，召喚されて参議に進んだ。太白星の子であるとか，伝説の多い人物である。

「さが悪，なければ無，よけむ善」と読めば，嵯峨天皇の時代ならば，死罪に値することになる。さが＝嵯峨（天皇），無し，善よけむ，つまり嵯峨天皇がいなければよいとなり，天皇に対する反逆の意となるからである。これほどの難しい落書を読み解ける知的人物は，篁を除いてあるまいとて，彼が指さされたのであるが，「子子子子子子」を見事に解いて，難を逃れたという説話である。この場合の「落書」は社会の問題ではあるが，他の用例とは違い知恵問答のようなものとなっていた。「芸は身を助ける」ではないが，知的柔軟さは，命を助け，社会の危機をも解決するものであった。

次に新井白石の『折たく柴の記』（一七一六年～）をみてみたい。白石は六代将軍徳川家宣を補佐して，幕政に関与したが，彼の「落書」に関する態度は次のようなものであった。「落書」は，幕府の施策に対して反対意見を言いふらし，社会を混乱させるものという見方もあるが，多様な意見を聞くことで，人々の施策への受け取り方が理解できる。大いに聞くべきであると言っていた。

> 十一日に施行すべしとて，九日の日に仰せをうけ給り給ひしかば，老中の人々には，某がつげごとならぬ事はしり給ふめり。其時の仰を奉られし人々の中，相模守政直朝臣，河内守正岑朝臣，豊後守正喬朝臣等の三人は，今もおはす也。世には，金銀御遺言所といふ事をかきし札を我門の扉にをしてありしを見しなど，いひしにや。又此事につけて思ひ出る事こそあれ。御代の初に落書の事ども多かり。延宝の時にも，此事ありしかど，此たびの事のごとくにはあらず。されば，老中の人々，「此事日々にさかりならん事しかるべからず。きと禁じ止むべし」と申されしを，「世の人かゝることによりて，憚るところもなく思ふ所はいふ也。されば，我が警戒とすべき事も，取用ゆべき事もあらめとおもへば，「たとひいかなる事しるせしもの也とも，うつしまいらせよ」と，近く召しつかふわか侍どもにはいひき。人々もまたもとめ得て，見つべき事也。此等の事禁じ止めて，世の言路を塞がん事もつともしかるべからず」とぞ仰せられける。

小字書きして，いわば注記の如くで，白石の主張がはっきり見て取れる。「金銀御遺言所」と書いた札を門に貼られ（落書）ては，お偉いさんとしては，面目丸つぶれということであろう。賄賂など沢山もらったなどと噂のある役人の屋敷であろう。庶民の鬱憤はこうでもしなければ収まるまい。対して，老中たちは「きと禁じ止べし」と権力をかさに着て，禁止させようとする。

白石は，世間の人は「憚るところもなく思ふ所はいふ也」と正直であると認める。だから，どのようなことであれ，報告しなさいと言った。<「たとひいかなる事しるせしもの也とも，うつしまいらせよ」と，近く召しつかふわか侍どもにはいひき>。「世の言路を塞がん事もつともしかるべからず」と述べて，人々の言論をふさぐことがあってはならない。「言路を塞ぐこと」は最もよくないことだと締め括る。

二，「オトシブミ」

「落書」の用字ではなく，「オトシブミ」もしくは「落とし文」と表記する場合を二作品検討してみたい。

『愚管抄』巻第五「二條」を紐解く。『愚管抄』は九条兼実の弟，天台座主慈円の著作。一二二〇年の成立。和漢の年代記や，神武天皇から順徳天皇までの歴史及び著者の歴史観を仮名交じり文で記したもので，後の史書に強い影響を与えたと言われる。

「オトシ文」表記は，巻第五の源義朝に係る記述に登場する。義朝は下野守となり，保元乱に後白河天皇方に与し，白川殿を陥れ，左馬頭となったが，平清盛と不和となり，藤原信頼と結んで平治の乱を起こし，敗れて尾張に逃れ，家人の長田忠致に打たれた。

サテ義朝ハ又馬ニモエノラズ，カチハダシニテ，尾張国マデ落行テ，足モハレツカレタレバ，郎等鎌田次郎正清ガシウトニテ内海荘司平忠致トテ，大矢ノ左衛門ムネツネガ末孫ト云者ノ有ケル家ニウチタノミテ，カカルユカリナレバ，行ツキタリケル。待ヨロコブ由ニテイミジクイタハリツツ，湯ワカシテアブサントシケルニ，正清事ノケシキヲカザドリテ，ココニテウタレナンズヨト見テケレバ，「カナヒ候ハジ。アシク候」ト云ケレバ，「サウナシ。皆存タリ。此頸打テヨ」ト云ケレバ，正清主ノ頸打落テ，ヤガテ我身自害シテケリ。サテ義朝ガ頸ハトリテ京ヘマイラセテワタシテ，東ノ獄門ノアテノ木ニカケタリケル。ソノ頸ノカタハラニ歌ヲヨミテカキツケタリケルヲミケレバ，

下ツケハ木ノ上ニコソナリニケレヨシトモミヘヌカケヅカサ哉トナンヨメリケル。是ヲミルヒトカヤウノ歌ノ中ニ，コレ程一文字モアダナラヌ歌コソナケレトノノシリケリ。九條ノ大相国伊通ノ公ゾカカル歌ヨミテ，オホクオトシ文ニカキナドシケルトゾ，時ノ人思ヒタリケル。

平治の乱に敗れた源義朝はついに頸を打たれ，その頸は東の獄門の木にかけられた。その傍らに大相国伊通（藤原伊通）詠出の歌が掛けられていた。伊通は後に太政大臣となる。無駄のない歌（アダナラヌ歌）はないと，口々に言い騒いだという。下野守であった義朝は，木の上におかれた頸にはなったが，紀国守を兼任する身にはなれなかった，と批判する。そのことは大々的には云いえないので，平治乱に係る影の声として「オトシ文」として世に広めたことであった。その時代の人々は噂し（流言）あったという。

次は『筑波問答』の「連歌は国政の助けになる」と説くところに登場する。『筑波問答』は二条良基の筆になり，良基と老翁との問答体で進められる。一三七二年には成立。まとまった連歌論書の最初。その四「連歌は国の政（まつりごと）のたすけなどにも侍るべき」を見よう。

一，問ひて云はく，「連歌は国の政（まつりごと）のたすけなどにも侍るべき」など申す人のあるは，あまりの事にや。

答へて云はく，返々も事あたらしきお尋ねかな。大かた歌といへるは，政の悪きをも，正しくは申すことの恐れあれば，物によせて歌を作りて落し文にし侍れば，国王諸侯も是をご覧じて，国の政を直されしなり。唐の歌は，毛詩といふ文もみなこの歌どもなり。さてこそ申す人は罪なくて，国の政はなほる事にて侍れ。我が国にも，日本紀の歌はみな童謡とて，落し文にて侍るなり。万葉よりぞ，ただ月花に対したる歌はおほく詠じ侍る。されば，古今の序にも，「其の実みな落ちて，其の花ひとり栄ふ」といふはこれなり。また，「まめなる家にはもてあそばず，色好みのなかだちとなれる」も，みな歌のやうやうすたれゆくさまをいへり。今の歌は，ただ花をもてあそび月をめでたるばかりにて，風雅の姿のなきにや。

連歌は国の政（まつりごと）の助けになるのはもちろんであるが，率直に，直線的に語ることを憚る。「物によせて歌を作りて落し文」として間接的にそっと暗示することを旨とする。「ものによせる」そして「落とし文」として。いわば「ひとのふり見て我がふり直せ」という方法なのである。国王諸侯が自然のうちに，自らの立場で，「落し文」として置かれている内容を読み取り，汲み取るという態度なのである。

ここで語られる「落し文」は間接性の象徴的表現としてある。日本書紀の童謡もみなこのスタイルで，直接的な働きかけとしては，機能していないと『筑波問答』はいうのである。

終りに

織豊期の日本語像を浮き彫りにした『日葡辞書』はVotoxibumiを立項して，「人の手に取られて見られるように，投げ出したり，落として置いたりする手紙」と説明している。原版は1603年にイエズス会の手で刊行。1604年に補遺の部が刊行された。1980年に岩波書店から『邦訳　日葡辞書』として刊行され，上の訳文はこれをよる。「文＝ふみ」は手紙という理解で，誰かが不特定の多数の誰かに向けて発せられた文ということになる。

既に述べたように「落書」という漢語が日本語の「おとしぶみ」と出会って，その意味を具体化した最初の例は，『菅家文章』で，900年の事であった。これが最も古い「落書」の用例であったが，漢語で「落書」と表記されたが，その意図するところは「オトシブミ」であった。後に「おとしぶみ」「おとし文」などとも表記される。マスコミ，ミニコミ等社会コミニュケーションの役割をはたし，社会機能をテーマとするものであった。

文を落とす，―その時と場所，そして筆者を不特定とすることで，匿名性を維持し，大衆の希望，主張，見解として流通する。多くの人々の見解を整理・纏め，社会の希望とすることで，マスコミとなりえた。時代，社会を象徴的に捉えることもこれによって可能となったといえる。それを昆虫の繁殖行動と重ねて理解することで，呪術的な色彩を帯び，神の啓示，――よって絶対的な信憑性を持つこととなった。動物行動という，人間とは別の系のあり様を引用することで，その類似をも踏まえ，深い意味を持つようになったのだと思われる。

参照文献

『菅家文章』（岩波日本古典文学大系　第二期72，昭和37年）
『本朝文粋』（岩波日本古典文学大系　第二期69，昭和34年）
『平家物語』（岩波日本古典文学大系28，昭和35年）
『太平記』（岩波日本古典文学大系36，昭和36年）
『折たく柴の記』（岩波日本古典文学大系32，昭和35年）
『江戸笑話集』（岩波日本古典文学大系　第二期100，昭和36年）
『連歌論集』（岩波日本古典文学大系42，昭和41年）
『愚管抄』（岩波日本古典文学大系　第二期86，昭和41年）
『邦訳　日葡辞書』（岩波書店，1980年）